

活動の概要

耕作権を引き継いだ農地をフィールドとし、工学系の視点から活用法を模索・実践している。2018 年頃からはこの対象を広げてきた。すなわち、今日一般的にはサービスとして受けるであろう事柄についても、実現可能であれば自身で実施した。これら活動が地域で知られることによる影響が見え始めてきた。地域における持続可能性へと接続していきたい。学内では、自身が属するプロジェクト中心に、論文指導やイベント運営、各種制作を行った。

学内での活動

1 委員会等

教務、学生、図書、入試実施、発明等審査の各委員会にて、委員として各委員会の運営にあたった。M2 の学年担当を務めた。

2 授業

次の各授業を担当した。

メディア表現基礎 4、デザイン特論 B、プロジェクト技術演習（情報工学）、プロジェクト実習、特別研究

2.1 メディア表現基礎 4

山田晃嗣、吉田茂樹、前林明次、三輪真弘との共同授業。当年度は「人工知能」をテーマとして扱った。人工知能を活用したサービスや製品の現状や、研究の最前線を理解し、今後の社会や我々の生活を大きく変える可能性を感じさせることを目的とした。また、現在の AI 技術に触れる時間を設け、将来に人工知能がどのような存在になり得るかを、具体的な制作物で自由に表現してもらった(写真右)。



制作物発表（メディア表現基礎 4）

2.2 デザイン特論 B（身体×デザイン）

平林真実との共同授業。科学技術の発展によってもたらされる一つの予測としてシンギュラリティという概念を扱っている。授業ではまずメディア史をおさらいしてから、シンギュラリティという概念の概略を紹介した。その後、書籍「シンギュラリティ 人工知能から超知能へ」を輪読した。加えて、映画「トランセンデンス」を視聴し、これらの知識を踏まえて未来の生活についてそれぞれが想像し、ディスカッションした。

3 プロジェクト実習

次の各プロジェクトを分担した：福祉の技術プロジェクト、根尾コ・クリエーション、体験拡張インターフェイスプロジェクト

3.1 福祉の技術プロジェクト（分担）

当年度は、履修生の研究指導、および、これまでの成果の展示が中心であった。成果展示の一つは、本巣市にある大型ショッピングセンターにて開催された「福祉体感イベント」の一企画「福祉×技術」として位置づけられた（写真右上）。もう一つは、ソフトピアジャパンセンタービルにて行われたロボフェスへの出展である（写真右下）。例年のように、オープンハウスや卒展でも展示を行った。



上：ショッピングセンターでの展示

下：ロボフェスでの展示

3.2 根尾コ・クリエーション（分担）

主な活動は、盆踊りの記録、水源や神社、食文化の調査など。これらを冊子としてまとめた。ここでは「根と茎と菌」をテーマに、根尾地区で見られた、強固な結びつき・共生ネットワークを中心にまとめられた。卒展では、展示中央のシンボルとして根尾に関係する木材等を使用し、「御神木」を表現した（写真右上）。また、「ねお古材団」の活動も継続して行った。ねお古材団は、根尾地区に残される貴重な什器や建築材を保存し、希望する人に引き渡すことを狙った活動である。材団として、大工道具や廃材を使ったワークショップなども行った。これら活動については、昨年度末にウェブサイトを作成しそこで紹介している (<http://neocozai.ga>)。また、根尾の能郷地区で世襲によって受け継がれている、能・狂言の準備（衣装の虫干し）を視察した（写真右下）。これらは、昭和 51 年に国重要無形民俗文化財の指定を受けており、だからこそその苦労など裏話も伺うことができた。



卒展での展示



能・狂言準備（衣装の虫干し）

なお、本プロジェクトは当年を区切りとし、今後は一部の活動は Community Resilience Research プロジェクトとして引き継がれる。昨今の異常気象による災害や未知の疫病蔓延など、強靱性（resilience）の重要性が見直されており、時代に即した活動へと展開させたい。

1 テクテクテク勉強会

勉強会に参加し、第一回の進行役およびレポートを担当した。本会は、これからの持続可能な社会を創造していく新しい科学技術やデザインについて学ぶ勉強会である。県内研究機関の研究者らを講師にお呼びし、多様な関心を持つ参加者で、新しい科学技術の可能性について一緒に考えていくことを目的としている（写真右）。

<https://www.iamas.ac.jp/activity/techtechteku01/>

<https://www.iamas.ac.jp/report/tekutekuteque01/>



テクテクテク勉強会

2 個人としての活動

2018 年頃からは、「一般的にはサービスとして第三者に任せるであろう身の回りのこと」を可能な限り自力で行っている。実家の木塀が屋根を中心に朽ち始めていたため、この補修と屋根の覆いを施行した。対象とする木塀は全長 50m ほど。屋根板全体に加えて、部分的には屋根を支える腕や柱も複数箇所が朽ちていたため、これらの形状を採寸し修復した（写真右上）。屋根の部分は雨よけのため鉄板葺きとした。鉄板は、折り曲げ機を余剰材で自作し加工した（写真右下）。この際、鉄板を加工しやすくするために屋根の形状をシンプルなものと変更している。当初、補修を行うにあたり、木塀屋根の様々な形態を調べたり、屋根板の保護方法、価格や入手性を調べたりした。最終的には安価に入手でき、サイズや形状を合わせられる方法として、カラー鋼板の利用を候補とし、鉄板の加工・施工方法を調べた。インターネットにて鉄板の加工・施行を自力で行っている事例を見つけ、今回の方法を採用するに至った。



木塀の腐朽した屋根、腕、柱を修復

これまでの活動を通じ、「自身のできる範囲」が広がってきていることを実感する。これはスキルの向上だけを指しているのではなく、対象の捉え方、すなわち、仕組みなどがどうなっているか、どうしたら可能か、どの部分が困難そうか、など、より広い対象について、習慣として想像するようになってきているのだろう。また、こうした自身の活動が知られるようになり、前年には「ログハウス譲渡」の話が舞い込んだり（自力にて移設し活用している）、当年には近所の木造二階建日本家屋解体の話がもたらされたりした（解体を体験し現代の廃棄物処理事情を知ることができた）。最近では、近隣の使用されない農地売却についての相談も持ち上がっており、一連の活動によるであろう影響・変化を感じつつある。



自作の折り曲げ機で屋根用に鉄板を加工

3 その他の活動

- ・ 地域の福祉委員（一期二年、三期目）
- ・ 補助金 書面審査業務
- ・ 産業人材育成事業 プロポーザル評価会議委員・委員長
- ・ 岐阜県立岐阜商業高等学校 模擬授業（AI について考える）